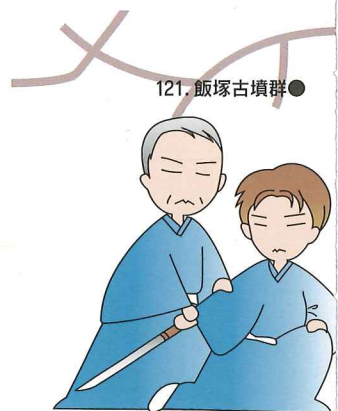
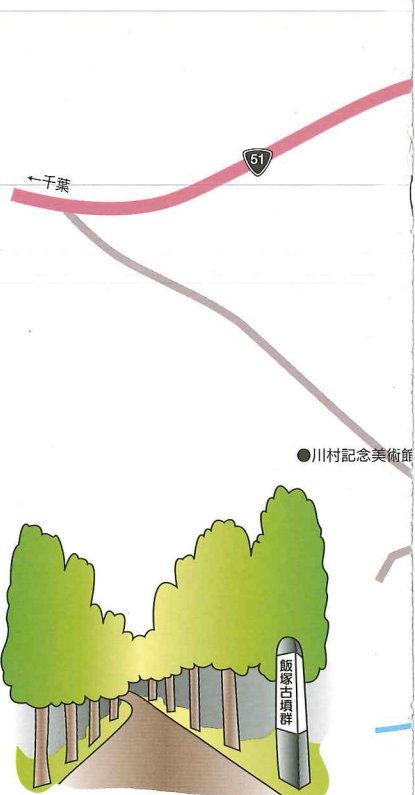
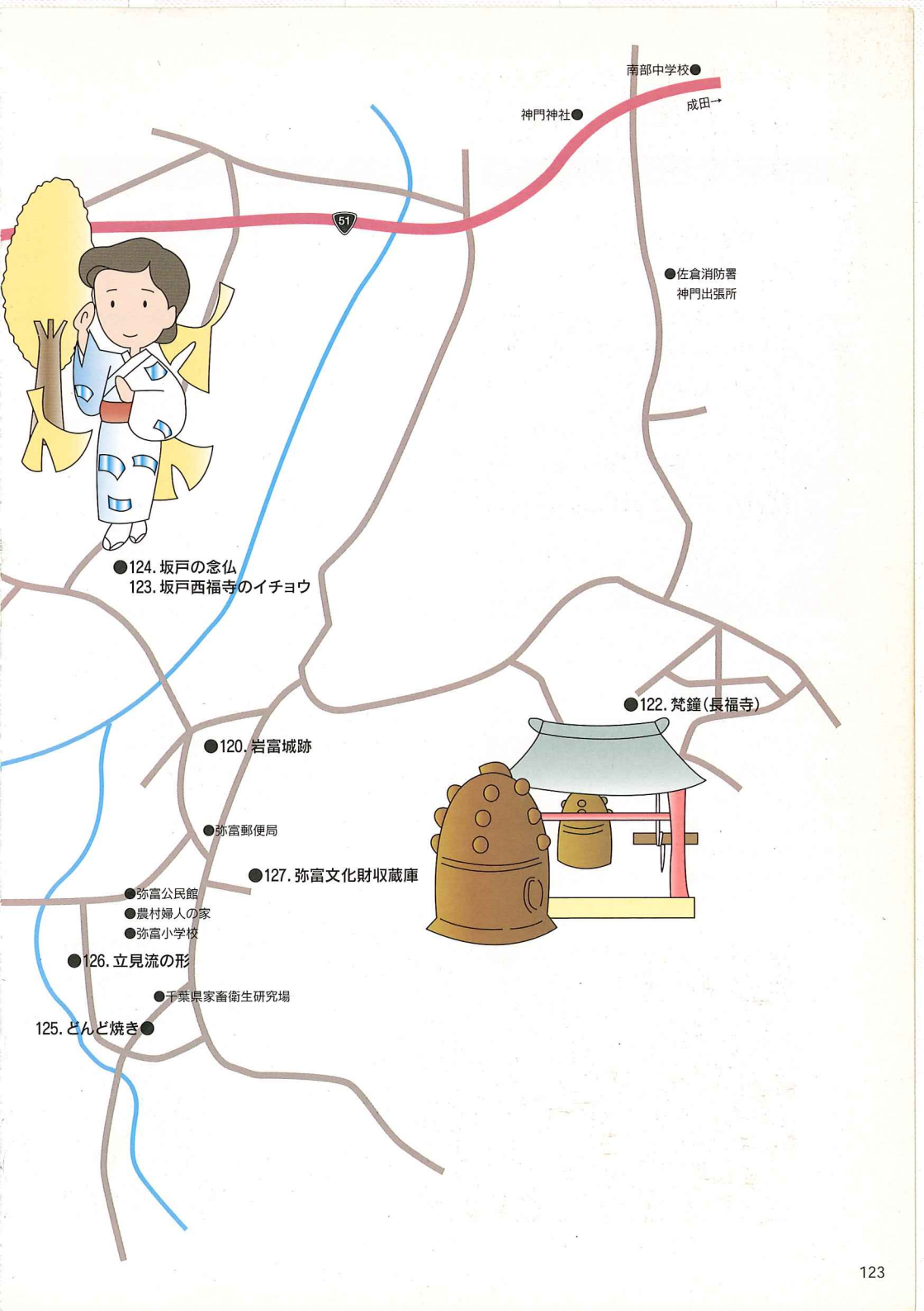


多くの民俗行事を今に伝えるまち

# 【弥富地区】

-  120. 岩富城跡(岩富) .....124
-  121. 飯塚古墳群(飯塚) .....124
-  122. 梵鐘[元禄七年在銘](岩富) .....125
-  123. 坂戸西福寺のイチョウ(坂戸) .....125
-  124. 坂戸の念仏(坂戸) .....126
-  125. どんど焼き .....126
-  126. 立身流の形(岩富) .....127
-  127. 弥富文化財収蔵庫[民俗資料展示室](岩富) .....127





南部中学校●

神門神社●

成田→

●佐倉消防署  
神門出張所

●124. 坂戸の念仏  
123. 坂戸西福寺のイチョウ

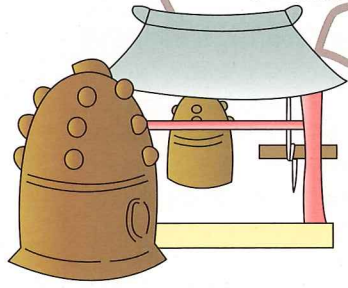
●120. 岩富城跡

●弥富郵便局

●127. 弥富文化財収蔵庫

●弥富公民館  
●農村婦人の家  
●弥富小学校

●122. 梵鐘(長福寺)



●126. 立見流の形

●千葉県家畜衛生研究場

125. どんと焼き●



120

## いわとみじょうあと 岩富城跡



岩富町にあるこの城跡は、鹿島川と弥富川の合流点を見下ろす台地にあります。この城跡の中心部は五角形をした平坦地であり、その周囲には土塁が巡っています。この東側と南側には空堀があり、北側と西側には鹿島川に面した崖に細長い平坦地を設けて、防御を強化しています。東側にある堀には出入り口となる土橋が設けられており、その両脇に土塁を設けて守りを固めています。この土塁は、出入り口の両側にて微妙に前後しており、侵入してくる敵を側面から攻撃できるようになっています。この他の城の区画は、中心部の南東に方形の区画がみられる以外は、現状では把握しづらい状況です。

この地域には千葉氏一族である白井氏が、領主として存在しましたが、15世紀後半には原氏がこの地を支配します。江戸時代には徳川家康によって北条氏勝がこの地に配されましたが、慶長18年（1613）の北条氏転封により、岩富城は廃されました。



121

## いづかこふんぐん 飯塚古墳群

飯塚古墳群は鹿島川と岩富川が合流する部分に突き出た台地上に位置しています。古墳群は前方後円墳1基、円墳15基からなる群集墳であり、現在16基の古墳が確認されています。うち7号墳は発掘調査されており、形態及び規模が判明しています。

早稲田大学考古学研究室による『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』では、既に消滅した16号墳について、「古墳は宅造によって削られたが、そのおり石棺と刀剣13振が出土した。」と記述しています。また、この古墳の地権者によれば、墳丘裾部において2基の箱式石棺が検出され、うち一基には朱が塗られており、石棺内から人骨1体の他、直刀14振が見つかったとのことでした。

古墳群の盟主と考えられる前方後円墳は、全長38mを測り、その形態から古墳時代後期に造営されたと考えられます。





122

ぼんしょう  
**梵鐘** (元禄七年在銘)



岩富にある日蓮宗勝興山長福寺は岩富町の京隆山教蔵寺とともに、本土寺(松戸市平賀)の末寺でした。戦国時代に本土寺側では長福寺の檀徒を「ヤトミ衆」、教蔵寺の檀徒を「イヤトミ衆」として掌握していました。

長福寺には元禄7年(1694)在銘の梵鐘があります。総高1.45m、口径76cmの梵鐘です。乳5段5列と縦帯に各2個を配し、合わせて108個として百八の煩惱になぞらえており、上帯は素文、下帯には唐草文をあしらい撞座は龍頭の向きと同じ方向にあります。江戸時代に作られた梵鐘によくあるように、駒の爪(鐘の最下部)が太く外に出張る特徴を備えます。

池の間(中帯の上)のうち二区に鑄込まれた銘文には、元禄7年17世日堯にちぎょうの時に、江戸深川の工人田中七右衛門尉藤原重次が鑄造したことを記し、さらに長福寺の開基について、本土寺9世の日意上人にちいが檀徒原左衛門尉景広はらさえもんの力を得て、文明2年に建立したと記しています。



123

さかどさいふくじ  
**坂戸西福寺のイチョウ**

イチョウはイチョウ科イチョウ属に属する雌雄異株の落葉高木です。国内に化石木がないことから中国が原産であると考えられています。樹齢が長く、移植も容易であることから、全国各地の神社仏閣などに植えられ、老樹巨木として天然記念物に指定されているものも多く存在します。

坂戸にある浄土宗金剛山願正院西福寺のイチョウは境内に植えられており、樹高23m、目通り幹囲7.4mを計る樹勢旺盛な雌株です。延享3年(1746)の「坂戸村明細帳」にも「いちやう壺本 五かかえ」と見えます。

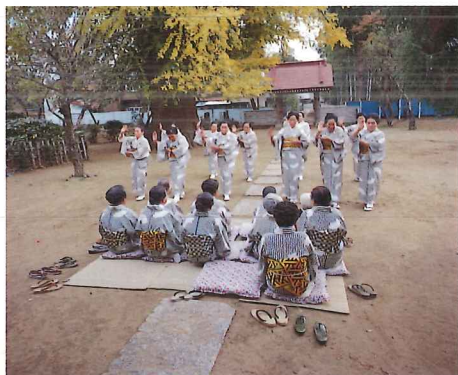
西福寺は、応安年間(1368~75)に良栄上人、千葉定胤により開基されたと伝えられています。そして、この樹は創建の前後に植樹されたと伝えられており、歴史的資料としても貴重です。

イチョウの種子は銀杏ぎんなんと呼ばれ、広く食用とされています。また、木材は建築材、彫刻材として利用されています。





## さかど ねんぶつ 坂戸の念仏



坂戸の浄土宗金剛山願正院西福寺に伝わる踊躍念仏です。坂戸地区の隠居身分になった女性たちにより念仏講が作られ伝承されています。

毎月9日の月次念仏、18日の観音講、22日の大師講があり、この他に1月16日の鉦起し、2月15日の涅槃講、春秋の彼岸念仏、4月15日の開山忌、8月14日・15日の盆念仏、送り念仏、8月16日の施蛾鬼、11月14日のお十夜、11月15日の鉦ふさぎ等が行われます。

特に、33年に一度のお十夜を「おおじゅうや大十夜」と称し、檀徒、総代なども加わって念仏供養塚まで練り歩き、念仏供養塚のまわりで念仏踊りをします。この時は、「朝がお」「しもつけ」の2曲を踊ります。

和讃は対象によって曲目が異なりますが、数が非常に多く、ことばも純粋な念仏和讃と異なり、風流踊歌などの要素が入り独特のものとなっています。



## や どんど焼き

1月14日の夕方から夜にかけて、どんど焼きという小正月の行事が現在も弥富地区と志津地区の青菅で行われています。どんど焼きとは、正月に使用した門松や注連縄などの正月飾りを一カ所に集め、高く積み上げて焼くものです。

木や竹を中心に立てられたどんど焼きは、高さ10数メートルになるものもあり、燃えさかる姿は実に力強いものです。火中に古くなった御札や達磨などを燃やし、この火にあかると体が丈夫になり風邪をひかないとか、書初めを火に投げ、高く舞い上がると上達するなどといわれます。火力がすこし弱まった頃を見はからい、篠竹などの先に餅を刺して焼きますが、この餅を食べると病気をしないといわれています。また、どんど焼きの燃えさしは魔除けになるといわれ、家路につく人は持ちかえり、門口に立てておきます。





126

## たつみりゅう かた 立身流の形



立身流は、戦国時代に立身三京によって創設された流派と伝えられます。佐倉藩堀田家の剣術における流派のひとつであり、佐倉藩士の中で傳承されてきました。幕末期には逸見宗助などの優れた剣士を輩出しました。

流儀の特色は、創始者立身三京が考案した向・円むこうまわいの秘剣を軸にして、刀法に鎗・棒・四寸鉄刀などの武器や甲冑組み打ち際の俵しやわら（柔術の一種）などを加えて、極めて実践的な総合武術に仕上がっているところにあります。無駄な虚飾を一切削り捨てた剛直壮烈な剣さばき、体さばきは、江戸時代以前の戦国武道の古格を十分に伝えています。

現在加藤高、加藤絃父子により傳承されており、多くの門弟とともに技を磨くための活動を行っています。



127

## やとみぶんかざいしゅうぞうこ 弥富文化財収蔵庫 （民俗資料展示室）

佐倉市の最も南部に位置する弥富地区は、市内では和田地区と並んで農業の盛んなところ です。

この地区で収集した民俗資料を展示する弥富文化財収蔵庫（民俗資料展示室）は、旧弥富小学校の敷地の中にあります。庫内には昭和59年（1984）に当時の弥富小学校PTAが中心となった弥富民俗資料収集委員会が収集した資料の中から代表的なものを分類、展示しています。

農村生活が急激に変貌するにつれ失われていく民具を収集、調査、展示し、「子どもたちに昔の暮らしを伝えたい」という同委員会の趣旨に沿い、市内小学校の市内巡りの受け入れなどを行っています。

展示室内には、衣、食、住生活に関する資料や各種農具が展示されています。

※見学は原則として10人以上の団体。

教育委員会文化課で受け付けています。



# 一日で京都を往復した小僧

大きいといえばやはり天狗を思い出すであろう。天狗伝説も市内に2、3あるが、この天狗も人知では到底考えられないことを言うゆつとやってのける怪力を持っているのである。

昔、おおじやもんじという寺があったが、ある年の大蛇7日の朝5つ半(7時)ごろ、住持は徳利を持たせ、酒を買いに小僧へやった。待っても待っても帰らないので不審に思い、和尚はあちこち尋ねさがし回って、前の並木に来てみると、徳利は松の枝にかけてはあるが、小僧は見えない。しかたなく、和尚は寺へ帰って待っていた。ようやく日が暮れて小僧が帰って来たので、問いただしてみると、

「京の祇園を見て、只今戻りました」

という。和尚は、

「14、5日もかかって京へは行くのに、日帰りなどとたわけたことをぬかすな」とはげしく叱った。10日ほど後、西国へ出た者が帰って寺に来て、四方山話しをしていたが、「この小僧さんは7日の日に、京の祇園祭をさじきで見えていたが、ずい分早く帰ってきたものだなあ」という。びっくりした和尚は、小僧に祇園祭の様子を聞いた。ところが、いうことがひとつひとつと少しも違わない。あまりのことに「どうしていったのか」と尋ねると、

「徳利を持って並木の中ほどまで行くと、大きな山伏が来て、今日は京の祇園祭りだ。一緒に見物しないかと、つれていってくれました」と。このとき和尚はハタと手を打って、奇態なこともあるものだ。全く天狗の仕業にちがいはあるまいと、その後はだれかれとなく話したので、世に知れわたったと「古今佐倉真住子」に書かれている。

天狗は空をかけるのであろうか。実に歩くのが早い。直弥にはこんな話がある。

村人たちが御獄へ参詣したときである。山で出されたジャガイモの味のわるさかたっていると、翌朝は自分の畑のものと同じ味を出されたので、「これは実に味がよいが、どこの産ですか」と尋ねると、

「昨夜あなた方は、ここのがまずいといっておられましたので、すぐ直弥へ行行って、あなたの家のザルをかりて、あなたの畑からとってきたものです」という。一夜で御獄から直弥まで往復するなど、滅相もないとあきれていると、

「これがその証拠です」

と、村人の家のザルを示し、

「お帰りになったら、どうか畑をしらべてみてください」

と言われるままに、調べてみると、たしかにジャガイモはその晩のうちに掘りとられていたという。

こんな天狗は、その無双の力のために、時に人々から恐れられたようである。同じ直弥に、こんなことも伝えられている。

「子は清水」の家は、背戸の山に基なお暗く大木を繁らせていたが、その中にさしわたし3尺(約1メートル)にも余る樫の大木があった。ある晩、風も吹かないのに突然、辰巳(南東)の方から、家も吹き飛ばかと思われ音音が、「バサバサ」とし、やがて、天地もくだけ去るかと思われほどの地ひびきとともに「メリメリ」という音がし、「カンラカラカラ」という笑いと共に、そのさわざは静まった。翌朝、おそるおそる起き出して見ると、さしもの樫の大木も、見事にへし折られていたので、村人たちは天狗のなせるわざと、恐れおののいたという。

しかし、天狗もときどき愛嬌のあるいたずらをするようだ。

佐倉の愛宕坂のあたりでは、夜ごとに、山から砂の落ちる音が「サラサラ」とする。屋は全く落ちないのに、夜ばかり落ちるのである。また、ある武士が夜、この坂を通っていると、ふところへ錢一文をなげこまれた。それは普通の寛永通宝であった。またある大晦日の晩、松井七左衛門が円正寺へ歳暮に行き、宵の頃この坂を通った。雨が降っていたので傘をさして坂中をおりたとき、上から何かがかごころとよほど高い音でころがつてきた。ちょうど七左衛門の両足の間にはさまり、歩くことができなくなったので、傘をたたんで柄で力まかせに突いたところが、「カンカン」音がした。片手でさわってみると、なんと茶釜であった。それから一時間ほどの間、傘の柄で突いていると、ようやく足がはずれたので、いっさんにかけ帰ったという。

これらはみな、天狗のしわざとみられている。こうして多くの怪異談を伴い、魔物としておそれられている天狗は、また「山の神」の別称だとされ、山の神はあるいは大山(祀命)とか、あるいは、木花之開耶姫だとか言われている。そのためであろうか。直弥の「子は清水」の家の背戸の山には、昔、桜の大木があり、それが木花之開耶姫の住み家であったと伝えているのである。

